2020年度 第1回きのさき見て歩き 開催しました

実施日　　2020年9月11日（金）　9：40～15：00
講　師　　坂田　文一郎氏　（城崎文化協会会長）
内　容　　「きのさき見て歩き」　「玄武洞・二見周辺を訪ねて」

＜戸島百載不朽碑とその周辺＞

戸島区内にある「戸島百載不朽碑」を訪れた。
江戸時代、年中使える水がなく不便を感じていた戸島の住人たち。隣村「結」と交渉し、川の水を灌漑用水として利用できるまでに至った過程が碑に記されている。

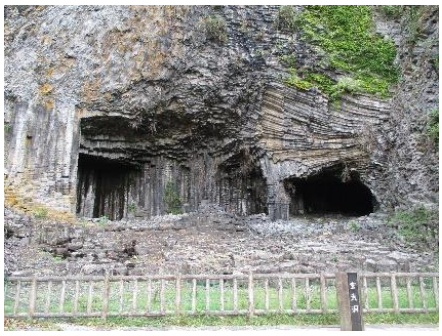
〈結（結の浦）〉

「結」は、契を「結」ぶに掛け合わせ、多くの歌人に好まれ、歌に詠まれた。

・「たちかへり　いくと急げばさしてこし　結の浦のかいもなきかな」
大中巨能宣　平安中期　後撰集選者

平安、鎌倉、江戸時代を代表する歌人が詠んだ歌の名所となっている。

＜玄武洞＞



火山の噴火活動によって流れ出した溶岩が、冷えて固まる際にできる六角形のあつまり玄武洞。（力の対比により六角形でないものもある）
ひとつずつ玄武岩を観察すると、時折２本の線が入ったものが見られる。これはもともと棒状だった岩を切った際にできた跡らしい。
玄武洞一番の名所「青龍洞」は、岩と岩が支えあい落そうで落ちない玄武岩岸が見られ、合格祈願のパワースポットにもなっている。手前の池は嘗てもっと広かったということだが、水が漏れ染み現在は半分程を埋め立てている。

＜円山川＞

曇っていたのが残念だったが、船で円山川を渡る機会はなかなかないので、４さいの女の子をはじめ大人も皆喜んでいた。船の上から見る円山川の景色は広大で美しかった。

円山川にはその土地土地の人が名付けた多くの呼び名がある。（竹田川、気多川、蓼川など）
・かみより舟の下りけるを、蔀あくる待らしてとはせければ、たでと申す物かりてまかるなりといふをきいて　たでかる舟のすぐるなりけり　　源頼光朝臣
たでとは蓼川のこと。別名として歌に詠まれることもあった。

＜二見水源＞

二見の浦は、古今和歌集の歌人である藤原兼輔が歌を詠んだことにより、多くの歌人が訪れるようになったという地。

・夕つく夜　おぼつかなしを　玉くしげ　二見の浦は　明けてこそ見め

古来より湧きでている二見の清水の水源に訪れた。水は澄んでいてとても冷たかった。
大正４年に豊岡市の水源としても使用され、現在は城崎方面も供給対象となっている。
江戸時代、訪れた沢庵和尚が歌を詠んでいる。
　・時さらば　舟さしよせん　玉手箱　二見の清水　冬ぞかひなき
柴野栗山は、天恵とよんだ。

険しい山道を登って二見谷古墳群「4 号墳」を訪れた。古墳は地面に空いた大きな洞窟のようで、階段を降りてみると中は真っ暗だった。羨道（玄室までの道）は奥行きがあり、しばらく歩くと玄室（死者を埋葬する石室）に到達した。置かれていた石棺（死者を埋葬する棺）は大きく、荘厳な雰囲気が漂っていた。
墳丘の形は円墳と思われ、誰の墓なのかは明らかになっていないという。
古墳群はあと３つあり、今回は行けなかったが興味がわいた。子どもたちも暗い洞窟を怖がることなく楽しんでいた。

解散の際、二見浦から見えた玄武洞公園。遠方から全体を見渡すとまた違う魅力があり、皆でしばらく見とれていた。